世界文学全集 5

バルザック

幻　　滅

II

ウジェニー・グランデ

生島遼一 水野亮 訳

河出書房

世界文学全集 5　バルザック II

© 1969

編集委員
阿部知二　伊藤　整
桑原武夫　手塚富雄
中島健蔵

昭和34年12月10日　初版発行
昭和44年 8 月 1 日　18版発行

定価　430円

訳　　者　生島遼一
　　水野亮
発 行 者　中島隆之
印 刷 者　草刈龍平
装　　幀　原　弘
印　　刷・中央精版印刷株式会社
製　　本・中央精版印刷株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座　東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目　次

幻　滅　II

第三部　発明家の苦悩

序
世紀児の悲しき告白……四
返　報……九
ある訴訟の物語
解決すべき問題……一一
勇気のある女……一三
若きユダ……一八
コワンテ兄弟……二三

最初の雷撃……二八
製紙法について一瞥……三五
地方の代訴人、とくにプチ・クローのこと……三七
手形支払不能の人のための償還計算に関する自由講義……四二
五十サンチームの印紙が砲弾と同じ速度をもち同じ損害をあたえること……四九
事件に火を放つということ……五四
父とふたりの雇人……五八
プチ・クローとカシャンがドゥープロンに助けられてますます燃やした
火事のいきさつ……六二
訴訟の最高潮……六七
地方では身柄拘束がほとんどありえぬこと……七五
二つの経験……八一
獲物を前に猟犬群が顔を見あわせるとき……八六
プチ・クローの未来の妻……九〇
司祭の一言……九五
一家の宿命的存在
放蕩兄貴の帰宅……九九
思いがけぬ勝利……一〇五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

勝利のからくり……一〇九
人生途上でときどき出会うような献身……一一六
リュシアン郷里での名声を真にうける……一一九
かくれているセリゼ……一二六
バルジュトン邸でリュシアンの報復……一三三
悲しみの極……一三八
最後のわかれ……一四三
街道での偶然……一四六
ある寵臣の話……一五〇
マキアヴェリの弟子が説く野心家のための歴史講義……一五三
エスコバール門弟による道徳の講義……一五八
スペイン人の横顔……一六三
なにゆえに犯罪者は本質的に悪へ人をみちびくか……一六六
恪闘で負ける瞬間……一六八
牢舎の影響……一七二
一日遅し……一七九
ある商事のはなし……一八六
結び……一九二

ウジェニー・グランデ

町方風俗……一九九
パリの従兄……二三九
鄙の恋……二四八
欲の約束、恋の誓い……二八三
内輪の悲しみ……三三六
世の習い……三六一
結び……三八二
年譜……三八五
解説……（生島遼一）三九五

幻滅 Ⅱ

生島遼一訳

主要人物

リュシアン・ド・リュバンプレ　アングレームに生まれた詩才に富む多情多感の美青年。本編の主人公。パリへ出て辛酸をなめ、やがて新聞界に登場して花々しい成功をおさめたが、成功をねたむ仲間にはかられて、ミシェル・クレチアンと決闘するはめとなり、負傷して郷里に帰る。義弟ダヴィッドを破産させたことに絶望して、ついに自殺をはかる。

ダヴィッド・セシャール　リュシアンの誠実な友人で、その妹エーヴの夫。勤勉な青年印刷業者。リュシアンを精神的・経済的に助けて苦闘する。第三部の主人公。彼は新しい製紙法を実現しようとするが、セリゼの裏切りと、義兄の不注意による破産のため、同業者コワンテ兄弟にその創案を奪われる。

ダニエル・ダルテス　貧窮と虚名と戦いつつ精進をつづける、才能ある理想家肌の青年作家。「セナークル」の盟主で、リュシアンのよき友人。のち大作家となる。

エーヴ　リュシアンの妹。ダヴィッドの妻。夫をたすけ貧苦とたたかい、コワンテ兄弟の策謀にたちむかう、美しく聡明な女性。

コワンテ兄弟　アングレームの印刷業者。ダヴィッドの印刷所を買収し、新しい製紙法を手に入れようとする。

ミシェル・クレチアン　「セナークル」の一員で、熱烈な共和主義の硬骨漢。リュシアンにたいする誤解から決闘し、彼を傷つける。

セリゼ　孤児。幼時から印刷所の徒弟となり、ダヴィッドに引き立てられた男。コワンテ兄弟のためにダヴィッドを裏切る。

プチ・クロー　ダヴィッドの学友で、腹黒い野心家の代訴人。コワンテと結託して成功し、検事に出世する。

カルロス・エレーラ　脱獄囚ジャック・コラン。別名ヴォートラン。同名の僧を殺害してその人物になりすます。リュシアンを救う。

（その他の人物は上巻の主要人物のところを参照されたい）

第三部　発明家の苦悩

序

世紀児の悲しき告白

翌日、リュシアンは旅券の査証をうけ、ひいらぎのステッキを一本買って、ダンフェール通りの広場で辻馬車にのった。十スーでロンジュモーまではこんでくれた。アルパジョンから二里はなれたある農家の馬小屋を、さいしょの宿として寝た。オルレアンにたどりついたときには、すでにくたくたであった。だが、船頭が三フランでロワール川をトゥールまで乗せてくれた。しかもこの道中、食費に二フランつかっただけだった。トゥールからポワチエまでを、リュシアンは五日のあいだ歩いた。ポワチエをよほど過ぎてから、もう百スーしかもっていなかったが、旅をつづけるために余力をふりしぼった。ある日、野っ原で夜になったので、リュシアンは野宿の覚悟をした。そのとき、窪地の奥を一台の四輪馬車が坂道をのぼってくるのが見えた。駅馬車の御者や旅客や御者席の下僕などの知らぬあいだに、彼は荷物と荷物のあいだにわりこみ、そのかげに身をかくすことができた。そして、馬車の動揺をがまんできるような姿勢になって眠りこんだ。朝、目にあたる日光と人声とで目をさまして、マンルについたとわかった。この小さな町は、一年半前、愛と希望と喜びを胸いっぱいにいだいて、バルジュトン夫人を待ちあわせにきた場所だ。物見高い人びとや御者たちにとりまかれ、ほこりにまみれた自分の姿をみて、とがめられそうだと感じた。一足飛びにとび降りて口をきこうとしたとき、乗ってきた馬車からふたりの乗客が出てきて、彼の言葉をさえぎった。見ると、シャラント県の新知事シクスト・デュ・シャトレ伯爵とその妻のルイーズ・ド・ネーグルプリッスである。（ルイーズはもちろん、もとのバルジュトン夫人である）

「まあ、こんなおつれのあったことを知っていましたらねえ。わたくしたちといっしょにこちらにお乗りなさいな」と伯爵夫人がいった。

リュシアンは夫妻に謹遜と威嚇のこもった視線をなげ、冷やかに会釈して、マンルのさきのある抜け道にまぎれこんだ。どこか農家にたどりついて、パンと牛乳で朝食をすませ、休息して自分の今後を静かに熟考したい。懐中にまだ三フランあった。『ひなぎく』の作者は熱にうかされて、長いあいだ走った。しだいに景色のま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

くなる付近の地勢をつぶさに見ながら、川の流れにそって下った。昼ごろ、水面がやなぎの木にかこまれて、湖のようなかっこうになっている場所についた。立ち止まって、このさわやかなこんもり茂った木立ちをながめた。ひなびた風情に心うたれた。一軒の家が、川の支流をのぞんで建てられた粉ひき場と隣りあい、木々のこずえのあいだから、弁慶草をつけたわら屋根をのぞかせていた。この家の質朴な正面の構えは、ジャスミンや忍冬やホップのいくつかの茂みを飾りにしているだけであったが、付近一帯には、フロックスの花やこのうえなくすばらしい多肉植物の花がひときわ美しかった。どんな洪水にも通路が安全であるように、ふとい基杭でささえられたこの砂利固めのうえには、陽なたに漁網がひろげてあるのが、リュシアンの目にとまった。水門のなかにたぎっている二つの流れにはさまれた、粉ひき場のむこうにある澄んだ溜め池では、あひるが泳いでいた。粉ひき場の水車が、うるさい音をたてていた。田舎風の腰掛けのうえに、肥えたおかみさんが編み物をしながら、雌鶏にいたずらをする幼児に気をくばっているのに、詩人は目をとめた。

「おばさん」すすみでてリュシアンは声をかけた。「ひどく疲れて熱があるんですが、三フランしかもちあわせていない。一週間ほど、黒パンと牛乳を食べさせわらのうえに寝させてくれませんか。その間に、ぼくが親類のものに手紙をかけば、金を送ってよこすか、ここへ出迎えにきてくれるでしょうから」

「そりゃあかまわないけど、うちのひとがいいといえばねえ。もし！　あんた！」

粉ひきが出てきた。リュシアンをじろっと見て、口からパイプをのけ、

「三フランで一週間？　なんにももらわんのと同じことじゃな」

詩人はこのこころよい景色をながめながら、

《おれは粉ひき場の下男で一生をおわるかもしれんな》

と考えた。そのうち、粉ひきのおかみがつくってくれた寝床によこになると、この家の主人たちが気味わるく思うほどぐっすり眠った。

翌日の昼ごろおかみが、

「クールトワ、あの若いひと、死んどるのか生きとるのか、行って見てくれろ。あれからもう十四時間になるよ。わたしゃあ、行く気がしないよ」

「おらの考えじゃ」と、粉ひきは自分の漁網や魚取りの罠をひろげおえてから、女房に答えた。「あのきれいな若衆は、てっきりどこかのくたびれた役者で一文なしになったものにちげえねえ」

「あんた、何からそんなことわかるだね？」

「そりゃあ、な！　王子さまでもなし、大臣でもなし、代議士でも司教さまでもないのにじゃよ。あの手はどういうわけで、なんにもせん人間の手のようにあのよに白いかい？」
「それなら、腹がへって目をさまさんのはふしぎなことじゃね」
　昨日かれらのもとにころがりこんだ客人のために、おかみは昼食の用意をすませたばかりであった。彼女は言葉をついだ。
「役者って？　どけへ行くんだろ。まだアングレームに定期市のたつころじゃあなし」
　粉ひきもおかみも、役者や王侯や司教のほかに、王侯であると同時に役者である人間、荘厳な聖職を身におびた人間、つまり《詩人》という一見無為だが人類の姿を表現しえたときにはその上に君臨する人間が存在するということは、思いもかけないことだ。
「じゃあ、どんな人間なんじゃろう？」
　クールトワは女房にきいた。彼女は、
「あのひとを客にしたら、あぶないことがあるじゃろか？」
「なあに！　どろぼうならあんなのよりもっと抜けめがない。どろぼうなら、あっしらはとっくに盗まれとる」
「ぼくは、王子でも盗賊でもないし、司教さんでも役者でもないんです」
　とつぜん、姿をあらわして、リュシアンは悲しげにいった。窓ごしに、夫婦の会話を聞いていたにちがいない。
「ぼくはパリからここまで歩いてきた、疲れた、貧しい青年です。リュシアン・ド・リュバンプレという名まえで。ルモーの薬屋、ポステルの前の主人だったシャルドンの子です。妹はアングレームのミューリエ広場で印刷業をやっているダヴィッド・セシャールと結婚しているんです」
「まあお待ち！」と粉ひきがいった。「その印刷屋さんはマルサックの地所をたがやしている横着なじいさんの息子さんじゃないかな？」
「そのとおり」
「たいへんなおやじじゃあ、ほんとに。うわさでは息子さんのとこの物をなにもかも売り払わしたという話。おやじさんのほうにゃ、へそくりを勘定にいれんでも、二十万フラン以上の財産があるということじゃが」
　長い期間の苦闘によって心身ともにまいってしまった場合、気力ではどうにもならなくなると、死か、死同様の自失状態がやってくる。そのとき抵抗力のある人なら気力をとりもどす。リュシアンは、やはりこうした危機におそわれていまにも屈服してしまいそうだった。その

とき義弟ダヴィッド・セシャールにふりかかった災難の話を、漠然とではあったが聞いたのである。

「ああ、妹よ。おれはなんということをしたんだ。おれは恥知らずの人間だ」と声をしぼって叫んだ。それから、臨終の人のように青ざめ衰弱しきって、木の腰掛けに倒れかかった。おかみがいそいで牛乳を一鉢もってきて、むりにそれを飲ませた。が、リュシアンは粉ひきに、手をかしてもらって寝床につきたいとたのんだ。いよいよ最期がきたと思ったので、彼は自分が死んで迷惑をかけるのをすまない、とわびた。死の幻影を見たこの美貌の詩人は、宗教心にとりつかれた。司祭に会って、罪の懺悔をし、臨終の秘蹟をうけたいといった。このような嘆きを、リュシアンのような美貌で姿の整った青年が、弱々しい声でもらしたので、クールトワのおかみさんは強く感動した。

「ちょいと、あんた。馬に乗って、マルサックのマロン医師を呼びに行っとくれ。この若いひとは、わたしにはどうもぐあいがいいと思えんし、先生ならどんなあんばいかがわかるじゃろう。それから、司祭さんもつれてくるんだよ。あのひとらのほうが、あんたより、ミューリエ広場の印刷屋さんがどうなっているかようご存じじゃろうしな。薬屋のポステルはマロンさんの婿じゃからね」

クールトワが出かけると、田舎の人はだれでもそうだが、おかみさんの頭に病気には栄養がどうしても必要だという考えがしみこんでいたので、リュシアンに元気をつけるものを食べさせた。リュシアンはされるままになりながら、心はいつまでもはげしい呵責にさいなまれている。この一種の精神的な局所薬の生みだす変化によって、しかし衰弱を脱した。

クールトワの粉ひき場は、マルサック――マンルとアングレームの中間の郡役所の所在地――から一里の所にあった。で、親切な粉ひきはマルサックから医者と司祭をすばやくつれてきた。このふたりはリュシアンとバルジュトン夫人との仲をうわさに聞いたことがあったし、ちょうどそのころ、この貴婦人の結婚の話と、彼女が新知事シクスト・デュ・シャトレ伯爵と同行でアングレームへ帰るという評判でシャラント県じゅうはもちきりだった。それで、リュシアンが粉ひきの家にいると知って、医者も司祭も、バルジュトン氏の未亡人が、いっしょに駆落ちしたあの青年詩人との結婚をやめた理由を知りたいし、この詩人が義弟のダヴィッド・セシャールを救うために帰国したのかどうかも知りたい、こういうつよい好奇心を感じた。好奇心とか人情とか何もかもがいっしょになって、さっそく、瀕死の詩人に救いの手がさしのべられたわけである。で、クールトワが出発して二時間のち、田舎医者のぼろ二輪馬車が、粉ひき場の石ころ道

をがちゃがちゃいわせるのが、リュシアンにきこえた。マロン氏がふたり――というのは、医者は司祭の甥で、同名だったから――やがて姿をみせた。こうして、リュシアンは、小さなぶどう栽培の村で近所同士が知りあうという程度に、ダヴィッド・セシャールの父とつきあっている人たちに出会ったわけだ。医者は瀕死の男を診察して、脈をとり、舌をしらべたあと、粉ひきのおかみをじっと見て、あらゆる心配を一掃するような調子でにやりとして、いった。

「おかみさん。きっとあると思うが、酒蔵にいいぶどう酒と、いけすにいいうなぎがあったら、病人さんにあげなさい。へとへとに疲れていなさるだけだ。そうすれば、この偉人さんはすぐ元気におなりだ」

「先生、からだじゃなくて、心に、ぼくの病気はあるのです。ここの親切な人たちから聞いたのですが、ぼくの妹のセシャール夫人の家に災難があったという話で、ぼくは死ぬほどの苦しみをうけているのです。おかみさんの話をきくと、先生はお嬢さんをポステルのところへお嫁にやりなさったそうですね。どうかおねがいです。ダヴィッド・セシャールのところの事情を、なにかご存じじゃありませんか？」

「いや、あのひとはいま牢屋にはいっておるはずだ。おやじさんが助けるのをことわったので……」

「牢にですって？　そりゃどういうわけで？」

「パリからの手形の件にひっかかってね。あのひとはそいつを忘れてたんじゃろう。うっかりしているひとじゃという評判じゃから」

「おねがいです。司祭さんとふたりだけにさせてください」詩人の顔色はひどく悪くなった。

医者と粉ひきとその女房はその場をはなれた。自分が老僧とふたりきりになると、リュシアンは声をあげていった。

「死がやってくるのが感じられますが、わたしは当然その死に値いする人間です。まったく人間としてなさけないこのわたしは、宗教の力にすがる以外にどうしようもないんです。司祭さま、妹や弟を苦しめているのはこのわたしです。弟といったのは、ダヴィッド・セシャールはわたしの義弟にあたりますから。わたしが手形を振り出したのですが、ダヴィッドはそれを払いこめなかった……わたしはあれを破産させました。わたしはひどい貧乏におちいっていたので、こういう罪のことをうっかりしていた。この手形がもとで起こった裁判沙汰は、ある百万長者が仲にはいってくれておさまりました。で、そのひとが、手形の払い込みをすませてくれたものと思っていたのですが。じゃ、そうではなかったのだ」

ついでリュシアンは、自分の不幸を物語った。まった

く詩人らしい、熱のこもった話し方で、詩そのものの話をしおえると、司祭にこう哀願した。アングレームへ行って、妹のエーヴと母のシャルドン夫人にあたって、真相をしらべてきてほしい、この自分がいまでも事態を収拾できるかどうかを知りたいから、というのだ。

「お帰りになるまでは、生きておれるでしょう」さめざめと泣きながら、「母や妹やダヴィッドが、ぼくを追っぱらわなければ、死んだりしません」

このパリっ子の雄弁、ひどい良心の呵責から流す涙、絶望で死にそうな顔、青ざめた美貌の青年の人間の力をこえた不幸の話、すべてが司祭のあわれみをそそり、関心をよんだ。

「田舎でも、パリと同じこと、人のいう話は半分しか信じちゃあいけない。うわさなどこわがってはいかん。アングレームから三里離れた所じゃあ、うわさにだいぶうそがはいってるにちがいない。セシャールのおやじさんは、わしの隣人だが、ここ数日来マルサックを離れていなさるので、たぶん、息子さんの事件をまるくおさめることにかかっているのじゃろ。わしはアングレームへいって、あんたが家へ帰れるかどうか知らせにもどってきましょう。家のかたにあんたを弁護してあげるとき、あんたの告白したこと、後悔したことは役にたちますで」

司祭が知らなかったことだが、リュシアンはこの一年半のあいだ、何度となく後悔したし、その後悔は、どんなに激しくても、申しぶんなくしかも誠実に演じられたお芝居のような値うちしかもたなかったのだ。司祭といれかわって医者が姿をみせた。彼は病人に神経の発作をみとめたが、その危険が遠のきはじめているので、病人をなぐさめて、滋養をとって元気を回復する気にさせた。

返　報

司祭はこの地方の地理と慣例をのみこんでいたので、リュフェックからアングレームへいく乗合い馬車がやがて通過するはずのマンルへひとまず行き、ここでその馬車に乗った。老僧は、甥の息子にあたるポステルに、ダヴィッド・セシャールについて問い合わせるつもりだ。このポステルは、かつて美しいエーヴをめぐってダヴィッドと恋を争ったルモーの薬屋である。当時リュフェック＝アングレーム間を走っていたひどいがた馬車から老人がおりるのに手をかしてやり、いろいろと細かに気をつかう小男の薬屋のようすをみた人なら、どんなに頭が鈍くとも、ポステル夫婦が、相続財産をあてに、自分らの生活の安楽を計画していることが察しられたはずだ。

「昼御飯はおすみですか。何か召し上がりませんか。見えることを知らなかったんで、おどろきましたが、まあよくきてくださった……」

何やかや一度に質問があびせられる。ポステル夫人はいかにもルモーの薬屋の女房になる運命をもって生まれたような女。小男のポステルと同じ背丈で、田舎育ちの娘らしく赤ら顔。見かけはごく平凡、唯一のとりえはひじょうに新鮮な感じといったところ。額に低くせまっている赤褐色の髪、態度、丸顔の目鼻だちに刻まれた単純さとそれに似合いの言葉つき、黄色がちな目——こうしたすべてから見て、その財産目あてに嫁にもらわれた女だということが瞭然だ。で、世帯をもって一年彼女は家庭を切りまわし、こんな金持ちの女相続人を見つけてすっかり気をよくしているポステルを完全に尻にしいているらしい。マロン家の出であるレオニー・ポステル夫人は男の子をひとりそだてていた。老司祭や医者や父のポステルからかわいがられたその子は、父や母に似たみっともない子供だった。

「それで伯父さん。いったいアングレームへなんの用でおいでになりましたの？」レオニーがいった。「だってなんにもおあがりにならないし、来るが早いか、もう帰る帰るっておいそぎだもの」

年よりの坊さんが、エーヴとダヴィッド・セシャールの名まえを口にだすと、ポステルはぱっと顔を赤らめた。レオニーは、夫をすっかり尻にしいている細君が、将来のためを考えて過去のことに必ずしめす嫉妬のまなざしを小男に投げた。

「伯父さん。あの人たちのことをそんなに心配なさるのはいったいどんな義理がおありですの？」レオニーは言葉にはっきり刺をふくめてそういった。

「あの人たちはな、気のどくなんだよ、おまえ」と司祭は答えた。そしてクールトワ夫婦の家にいるリュシアンのありさまをポステルに話してきかせた。

「へえっ！　そんなかっこうでパリからもどってきましたか！」ポステルは声をあげていった。「かわいそうな子だ。才気もあったし、えらい野心もっておったのに。麦をさがしにいってわらももたずに帰ったようなものじゃな。だがしかし、何をしにこっちへやってきたんだろうかな。あそこの妹はひどくこまっておる。あのダヴィッドにしてもリュシアンと同じことで、ああいう天才肌はみんな商売のことはからきしわからんから。で（商事）裁判所でこのダヴィッドのことで話が出たんですが、わしも判事として判決に署名しなけりゃならんでした。つらい立場でね。こんな今の事情じゃ、リュシアンが妹さんの家へ行けるかどうか、わしにはわからんし、いずれにしても、あのひとがここで住んでおった小

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo